千葉県文化財センター調査報告第274集

流山市野々下貝塚確認調査報告書

平成７年３月

千 葉 県 都 市 部

財団法人　千葉県文化財センター

流山市野々下貝塚確認調査報告書

平成７年３月

千 葉 県 都 市 部

財団法人　　千葉県文化財センター

序　　文

千葉県の西端に位置する流山市は、自然環境に恵まれ、原始・古代の人々の生活の痕跡が数多く残されています。近世以降には江戸川や利根運河の水運を利用した諸産業がめざましい発展をとげ、また現在では東京のベッドタウンとして発展しています。

この地域では、沿線の人口の増加に伴って、新しい幹線鉄道として、東京と茨城県つくば市を結ぶ首都圏新都市鉄道（常磐新線）の建設、これに伴う沿線地域の土地区画整理も計画しています。

千葉県教育委員会では、開発予定地内に所在する流山市野々下貝塚の取扱いについて検討するため、千葉県都市部都市整備課と協議した結果、その実態を把握することを目的とした遺跡範囲確認調査を実施することになりました。

確認調査は、千葉県教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが実施しました。現地調査は平成６年11月１日から11月30日まで、整理作業は引き続き平成７年１月31日まで行いました。

調査の結果、これまではっきりしなかった地点貝塚の正確な分布状況や時期を把握することができました。また、縄文時代の土坑等の遺構とともに多数の遺物を得ることができました。これらは、当地域における当時の生活や環境を知る上で大変貴重なものであります。

このたび、調査成果をまとめ、報告書を刊行することになりました。本書が学術的資料としてはもとより、一般の方々が郷土の歴史を理解するための資料として広く活用されることを願っております。

最後に発掘調査から本書の刊行に至るまで、御指導、御協力いただいた千葉県教育委員会をはじめ、千葉県都市部都市整備課、千葉県企業庁東葛飾北部建設事務所、流山市教育委員会に厚くお礼を申し上げます。また、調査を快く承諾してくださった地権者の方々、調査に御尽力いただいた調査補助員の皆様にも心から感謝の意を表します。

平成７年３月

財団法人　千葉県文化財センター
理事長　　奥　山　　浩

凡　　例

1．本書は千葉県流山市野々下１－149ほかに所在する野々下貝塚（遺跡コード220-018）の遺跡範囲確認調査報告書である。

2．調査は、千葉県との委託契約に基づいて、千葉県教育委員会の指導のもとに財団法人千葉県文化財センターが実施した。

3．発掘調査は平成６年11月１日から11月30日に、整理作業は引き続き同年12月１日から平成７年１月31日までそれぞれ実施した。

4．発掘調査及び整理作業、原稿執筆は、調査研究部長　西山太郎、印西調査事務所長　谷　旬の指導のもとに、技師　四柳　隆が担当した。

5．本書で使用した地形図の出典は以下のとおりである。

第１図：国土地理院発行1/25,000地形図『流山』『松戸』（平成４年）

第２図：流山市発行1/2,500地形図（平成２年）

第14図：流山市発行1/3,000地形図（昭和41年）

6．本書の図版１で使用した航空写真は、昭和63年に京葉測量株式会社によって撮影されたものである。

7．発掘調査の実施に当たって、秋元　昴、星野一美、堀越俊彦、中川　正の諸氏には所有地の調査を快く承諾していただくとともに多大なる御協力を賜った。記して感謝の意を表します。

8．現地調査から報告書の作成に至るまで、下記の諸機関・諸氏から多くの御指導・御協力を賜った。ここに記して感謝の意を表します。（敬称略）

千葉県都市部都市整備課　千葉県企業庁東葛飾北部建設事務所　流山市都市計画課

流山市教育委員会　JA八木　トミー流通サービス　増崎勝仁　阿部明義　岩城克宏

目　　次

序　文
凡　例
Ⅰ．はじめに ……1
　1．調査に至る経緯 ……1
　2．遺跡の立地と地理的環境 ……1
　3．周辺の歴史的環境 ……3
　4．調査の方法と経過 ……5
Ⅱ．各トレンチの状況 ……9
　1．第1トレンチ ……9
　2．第2トレンチ ……9
　3．第3トレンチ ……9
　4．第4トレンチ……11
　5．第5トレンチ……11
　6．第6トレンチ……11
Ⅲ．出土遺物……14
　1．縄文土器……14
　2．土製品……21
　3．石器……21
　4．貝サンプル……24
Ⅳ．まとめ……25
　1．野々下貝塚の遺跡範囲と形成時期……25
　2．周辺の古環境との対比……27

挿　図　目　次

第１図　野々下貝塚の位置と周辺の貝塚遺跡　…2
第２図　周囲の地形と調査範囲……4
第３図　野々下貝塚地形測量図　……7～8
第４図　１Ｔ　……10
第５図　２Ｔ・３Ｔ・４Ｔ……11
第６図　５Ｔ・６Ｔ　……13
第７図　遺構外出土土器（１）　……15
第８図　遺構外出土土器（２）　……17
第９図　遺構外出土土器（３）　……18
第10図　遺構外出土土器（４）　……20
第11図　遺構外出土土製品　……20
第12図　遺構外出土石器（１）　……22
第13図　遺構外出土石器（２）　……23
第14図　出土土器分布範囲　……26

表　目　次

第１表　トレンチ杭座標値……6
第２表　トレンチ別土器出土量　……11
第３表　出土石器観察表　……21
第４表　貝類種名一覧及び組成表　……24

図　版　目　次

図版１　遺跡周辺の航空写真（約1:5,000）
図版２　遺跡遠景
　１．南：芝崎方面から
　２．東：名都借方面から
図版３　遺跡近景
　１．北から　２．西から
　３．南東から
図版４　各トレンチの状況（１）
　１．１Ｔ全景（南から）
　２．１Ｔ－001・003（東から）
　３．１Ｔ－005（西から）
　４．１Ｔ－002（北西から）
　５．２Ｔ全景（東から）
　６．２Ｔ貝層部分セクション
　７．２Ｔ遺構検出状況（東から）
　８．２Ｔ－003（南東から）
図版５　各トレンチの状況（２）
　１．３Ｔ全景（東から）
　２．５Ｔ全景（北から）
　３．４Ｔ全景（東から）
　４．４Ｔ西端付近セクション
　５．６Ｔ全景（東から）
　６．６Ｔ－001（北東から）
　７．調査風景（トレンチ調査）
　８．調査風景（ボーリング探査）
図版６　遺構内・遺構外出土土器（１）
図版７　遺構外出土土器（２）
図版８　遺構外出土土器（３）・土製品
図版９　遺構外出土石器

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

近年、JR常磐線沿線では東京のベッドタウンとしての宅地開発が急速に進み、その波は茨城県中部にまで及んで朝夕のラッシュは既に限界に近い状態になっている。このため東京と茨城県つくば市とを結ぶ首都圏新都市鉄道（常磐新線）の建設が計画され、千葉県ではこれに伴って周辺地域の土地区画整理事業が計画されている。

事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについては、千葉県教育委員会を中心に関係者で協議されているが、開発予定地内に所在する野々下貝塚については、その実態を把握するための遺跡範囲確認調査を行うことになった。調査は千葉県教育委員会の指導のもとに財団法人千葉県文化財センターが実施することになり、平成６（1994）年11月１日から同年11月30日まで現地調査を、引き続き同年12月１日から平成７（1995）年１月31日まで整理作業及び原稿執筆を実施した。

2．遺跡の立地と地理的環境

野々下貝塚は流山市の市街地から東へ約1.8km、行政区分では流山市野々下１－149の場所にある。付近は流山市街からはやや離れており、東側の柏市にある東武野田線豊四季駅からも約1.7kmを隔てていることから、都心から30km圏という好位置にありながら宅地化は進んでいない。県道沿いに古くからの集落が展開しているほかは大半が畑地として利用されている。

流山市は千葉県の西端に位置し、西を南流する江戸川の対岸は埼玉県三郷市及び北相馬郡吉川町、北は野田市、東は柏市、南は松戸市と境界を接している。市域は東西約８km、南北約10kmで、面積は35.31km²を測る。

市域の西側は江戸川によって形成された沖積低地、東側は標高15～20mの下総台地下位面となっている。東側の台地面は坂川をはじめとする江戸川の支流によって樹枝状に開析されており、標高５m前後の沖積低地が奥深くまで入り込んでいる。これらの沖積低地は縄文海進期以降の環境変遷史を復元する上で重要な位置にあり、坂川流域でも地質学的な調査研究が進められている。

野々下貝塚は、流山市初石付近を水源とする坂川水系の小河川によって開析された支谷の左岸台地上に立地している。台地上には浅い溺れ谷が形成されており、その西側微高地肩部を中心に10地点ほどの貝殻の散布を表面観察することができる。散布範囲の規模から判断して遺構内に堆積する貝層であることが予想された。

第1図　野々下貝塚の位置と周辺の貝塚遺跡

3．周辺の歴史的環境

流山市内では、昭和55（1980）年の流山市教育委員会による調査で189遺跡が、その後の昭和60（1985）年の千葉県教育委員会による調査で3遺跡が追加されて合計192遺跡が周知されている。時期的には先土器時代から中近世までの全段階を網羅しているが、縄文時代の遺跡が最も多く227遺跡（6区分による時期別に1遺跡としてカウントしたため遺跡総数より多い。内訳は草創期0、早期16、前期72、中期78、後期57、晩期4である。）、次いで平安時代の104、古墳時代の49遺跡となっている。先土器時代は1遺跡しか知られていないが、これは調査例の少なさに起因するものであろう。

周辺の遺跡については、その数が膨大であることからここでは縄文時代の貝塚を伴うものに限って見てみたい。流山市を含む江戸川沿岸は、千葉市付近の東京湾沿岸、利根川の下流域と並んで貝塚遺跡が多く所在することで知られており、野田市山崎貝塚や市川市堀之内貝塚といった国指定史跡をはじめ、松戸市上本郷貝塚、市川市姥山貝塚といった学史上重要な遺跡が多数所在している。千葉県教育委員会の手で昭和58（1983）年に実施された県内所在の貝塚遺跡詳細分布調査によると、流山市内には17の貝塚を伴う遺跡が所在している。大規模な馬蹄形貝塚を形成しているのは上新宿貝塚と上貝塚貝塚の2遺跡で、これらについては過去の数次にわたる調査の結果多くの貴重なデータが得られている。上新宿貝塚については今年度の千葉県教育委員会による県内主要貝塚確認調査の対象となって、平成6（1994）年10月に確認調査が行われている。野々下貝塚を含む他の15遺跡はいずれも地点貝塚で、主体となる時期が不明のものや大半が破壊消滅しているものも少なくない。

野々下貝塚の立地する坂川水系についてみると、流山市初石付近に水源をもち本流から北側へ延びる小支流の沿岸にあるのは野々下貝塚のみで、他はすべて東や南東へ延びる支谷及び本流沿いの台地上に立地している。なお、野々下貝塚のある支谷と坂川本流にはさまれた、流山市芝崎、古間木付近の舌状台地上には貝塚は形成されていない。

東へ延びる支流は流山市松ケ丘付近を水源に約1.4kmほどを流下しており、柏市と流山市の境界をなしている。右岸の台地上は柏市で、ここには笹原遺跡群が展開しており、縄文時代中期の阿玉台式、勝坂式、加曽利E式を出土する笹原（II）遺跡内に3か所、後期堀之内式を出土する笹原（III）遺跡内に2か所の地点貝塚が所在する。これらには笹原（Ⅰ）貝塚～笹原（V）貝塚の名称が与えられている。この支谷が坂川本流と合流する地点のやや上流の左岸台地上流山市名都借地先には清滝院前遺跡があり、前期関山式期の地点貝塚が3か所知られている。

南東側へ延びる谷は坂川本流によるもので、前の2つの支谷との合流点から2kmほどのところでさらに二股に分かれ、それぞれ2km近く下総台地を開析している。一方の源は柏市酒井根付近で、谷の最奥部には柏市根木内台貝塚、天王前貝塚、松戸市殿内遺跡等が所在するが、いずれも既に破壊されて消滅しており詳細は不明である。殿内遺跡では貝塚は消滅しているもの

第２図　周囲の地形と調査範囲

の黒浜式、勝坂式、堀之内式の各型式が採集されている。もう一方の支谷の周辺は宅地開発が進んでおり、現在の地形図ではその形を明瞭に読みとることはできない。その水源は現在の松戸市小金原付近であり、最奥部には縄文時代後期から晩期にかけての大集落として著名な貝の花貝塚がある。中・下流部では、左岸の松戸市には東平賀遺跡や根木内遺跡が、右岸の流山市には前ケ崎貝塚が知られている。これら3遺跡はいずれも過去に調査歴があり、前期黒浜式から後期安行II式までの各型式が出土している。根木内遺跡のみ加曽利E式期に終焉を迎えている。

坂川は支谷の合流点を過ぎると流れを南西方向へ変えているため、左岸の南東側へ延びる谷と本流沿いの沖積低地にはさまれた松戸市の最北端付近には舌状台地が形成されている。この舌状台地先端付近には縄文時代前期前半関山式、黒浜式期を主体とする著名な幸田貝塚が所在する。またこの台地上には幸田貝塚とほぼ同時期の地点貝塚をもつ木戸口遺跡のほか、後期堀之内式を出土する中金杉台遺跡、堀之内式から加曽利B式を出土する殿平賀遺跡などがある。

坂川流域の貝塚群はそのほとんどが小規模な地点貝塚で、大規模ないわゆる馬蹄形貝塚が形成されているのは東平賀遺跡（東西120m、南北150m）と殿平賀遺跡（東西90m、南北80m）の2遺跡のみである。これらはいずれも堀之内式を主体とする貝塚であり、野々下貝塚の貝層の一部とほぼ同一時期に形成されたものといえる。

坂川以外の水系に属する貝塚遺跡も第1図に示しておいた。詳細は省略するが、20の柏市競馬場貝塚は手賀沼に流入する大堀川の、21の柏市川端貝塚から27の柏市寺前貝塚までは鬼怒川（現利根川）の水系に属するものである。これらはすべて小規模な地点貝塚である。

4．調査の方法と経過

調査は2×10mを5か所、計100m²のトレンチ調査による遺構の確認と、33,000m²に及ぶ調査対象範囲の全域に対してボーリング探査を実施して貝層の堆積範囲を確認することの2点に主眼を置いて行った。また業者委託による地形測量も行った。

今回の調査は遺跡範囲の限界確認が目的であることから、5本のトレンチのうち4本は調査対象範囲の東西南北端に設定した。各トレンチの詳細については次章にゆずるが、南端の第5トレンチ（以下5Tと略称）では規定の範囲内で遺構が検出されなかったが、後述の理由により北へ4m（8m²）拡張した。また、西端の3Tでは耕作による攪乱が激しく遺構の有無の判断が困難であったため、農道をはさんだ東側の県有地に2×6m（12m²）の6Tを新しく設定して調査した。当初予定の5本のトレンチのうち残る1本は、貝層のデータを得るため貝散布の比較的濃密な部分に設定することとし、慎重を期するためボーリング探査の結果貝層の存在する位置に合わせて設定することとした。各トレンチはいずれも任意の位置に設定し、両端に設置した基準杭の座標値の算出を地形測量と併せて業者に委託して実施した。算出された座標値は第1表のとおりである。

ボーリング探査は調査対象範囲全域にわたって実施したが、地上構築物や耕作物の関係で立ち入ることのできなかった場所もある。その範囲については第３図に示した。基本的な方針としては県内主要貝塚確認調査で行われている方法に準拠することとし、長さ１mの鉄製ボーリング棒を使用してピッチは１mを基準とした。ただし今回は方眼測量を実施しておらず、耕作中の畑地も多かったことから畑の畝や畦道の方向にあわせて各区画ごとに行っており、概ね１mピッチとなるように注意した。また、貝層を検出した部分の周辺ではさらにピッチをせまくして詳細に探査した。ボーリング探査はトレンチ調査と併行して行い、貝層検出部分の測点の計測を地形測量と併せて業者に委託した。

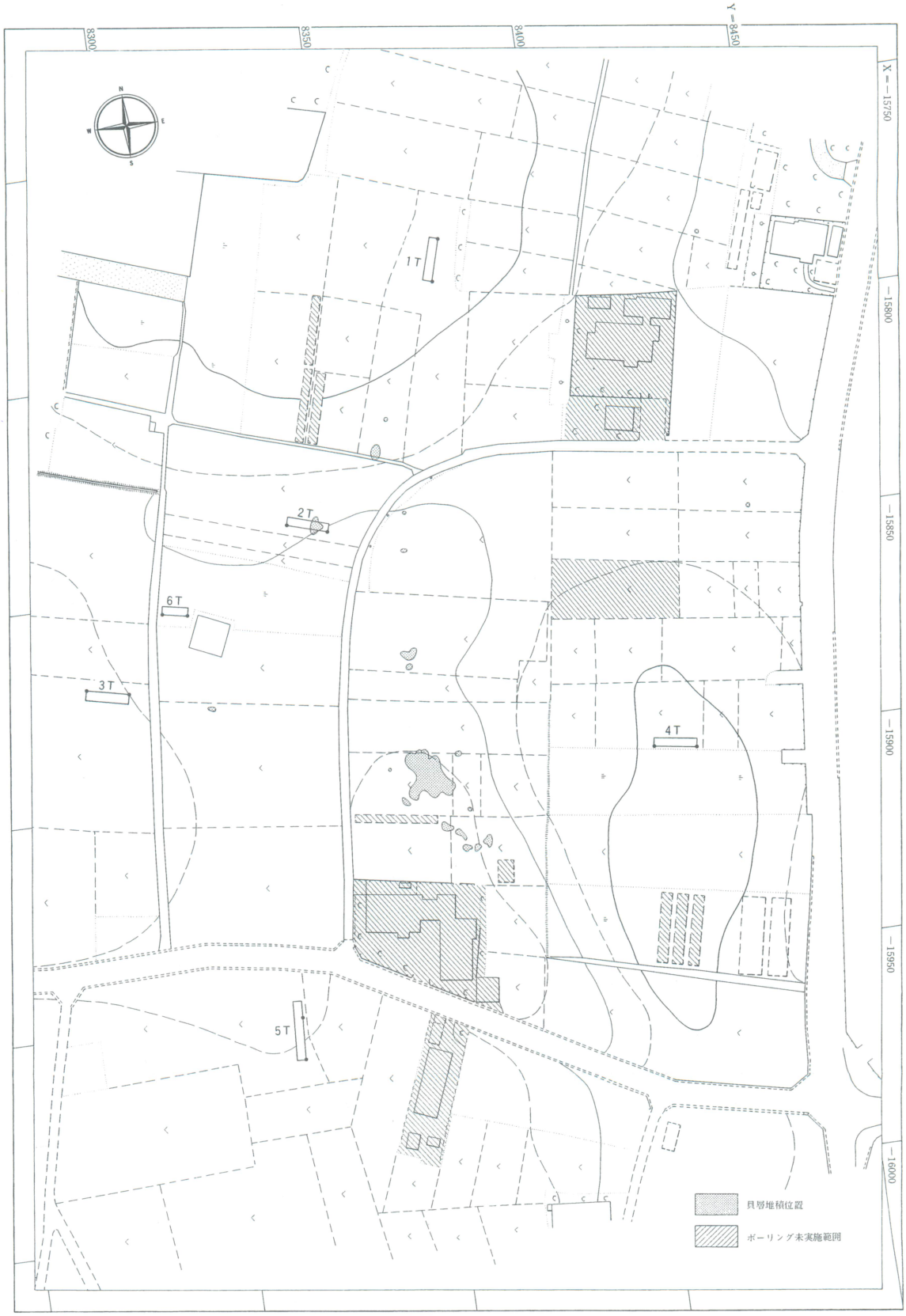
ここで、ボーリング探査の成果について若干触れておく。貝層の堆積は大小併せて計20地点確認した。最大で径約12m、最小で径約30cmであり、径２m～３mのものが多いことから遺構の廃絶後の窪地に投廃棄されたものであると思われる。径12mの貝層もアメーバ形の不整形を呈しており、複数のブロックが重複して現況を示しているものと想像される。なお、現在地表面に貝散布が見られる位置と、貝層の堆積範囲は必ずしも一致しなかった。

貝層以外については、ボーリング探査実施範囲の全域で周辺より深い部分を検出したが、これが遺構なのか近年の耕作に伴うものなのかは判断できなかった。５Tではトレンチの北側に落ち込みを確認したので拡張調査したが、この落ち込みはいわゆるイモ穴であった。標高15mのコンタラインより上では、一部の落ち込みを除いて地山深度は約30cm～50cmと一定であるが、北側や南側の溺れ谷内は深くなっており、本来はさらに比高差があったようである。特に南側の谷では４T付近を最深に急斜面が形成されていたものと思われる。なお、４Tより南では一度標高を上げてから沖積低地に落ちており、付近は水はけの悪い谷頭の窪地であった。

平成６年11月は天候に恵まれ、作業は順調に進捗した。11月18日までにはボーリング探査を完了し、トレンチも調査が終了し次第順次埋め戻して11月30日に全作業を完了、撤収した。

第１表　トレンチ杭座標値

杭番号	X	Y	杭番号	X	Y
１T－N	-15776,439953	8375,584861	４T－E	-15901,789539	8419,068830
１T－S	-15786,043569	8372,810554	４T－W	-15900,214516	8409,197022
２T－E	-15840,495201	8340,140739	５T－N	-15951,726884	8318,373359
２T－W	-15873,497380	8330,603762	５T－S	-15961,708161	8317,828659
３T－E	-15871,585283	8288,487459	６T－E	-15855,447940	8304,609559
３T－W	-15869,466349	8278,717159	６T－W	-15854,306566	8298,722600



第３図　野々下貝塚地形測量図（１：1.000）

II．各トレンチの状況

1．第1トレンチ

調査対象範囲の北端に南北方向に設定した。北側から入る溺れ谷の中央部に当たる。

1層と2層は新旧の耕作土である。その下位には明茶褐色土が堆積しており新期テフラの可能性があるが、溺れ谷内で水の影響を受けておりはっきりしない。

当トレンチでは結果的に5基の遺構を調査したが、南寄りに大規模な風倒木があり検出には困難を伴った。北端の溝状遺構の覆土は2層と連続しており、最近の地境と判断された。001は西側に突出部を持つ柄鏡形の袋状土坑である。底面直上に黒褐色土が水平に堆積していることから一定の開口期間を持つ貯蔵穴かと思われるが、上位の層中にはわずかに骨粉状の粉末が含まれていたことから墓壙に転用された可能性もある。1や4の土器から判断すると加曽利E式後半期の形成と思われる。003は001と隣接するピットである。覆土は粘性の強い黒褐色土で、遺物からみて001と概ね同時期であろう。004と005は不整形の土坑であるが、掘方は不明瞭である。005は新期テフラに切られており、出土遺物からも001や003と同時期であろう。002は3層を切っており、さほど古いものではない。かなり水が湧くことから井戸跡の可能性がある。

2．第2トレンチ

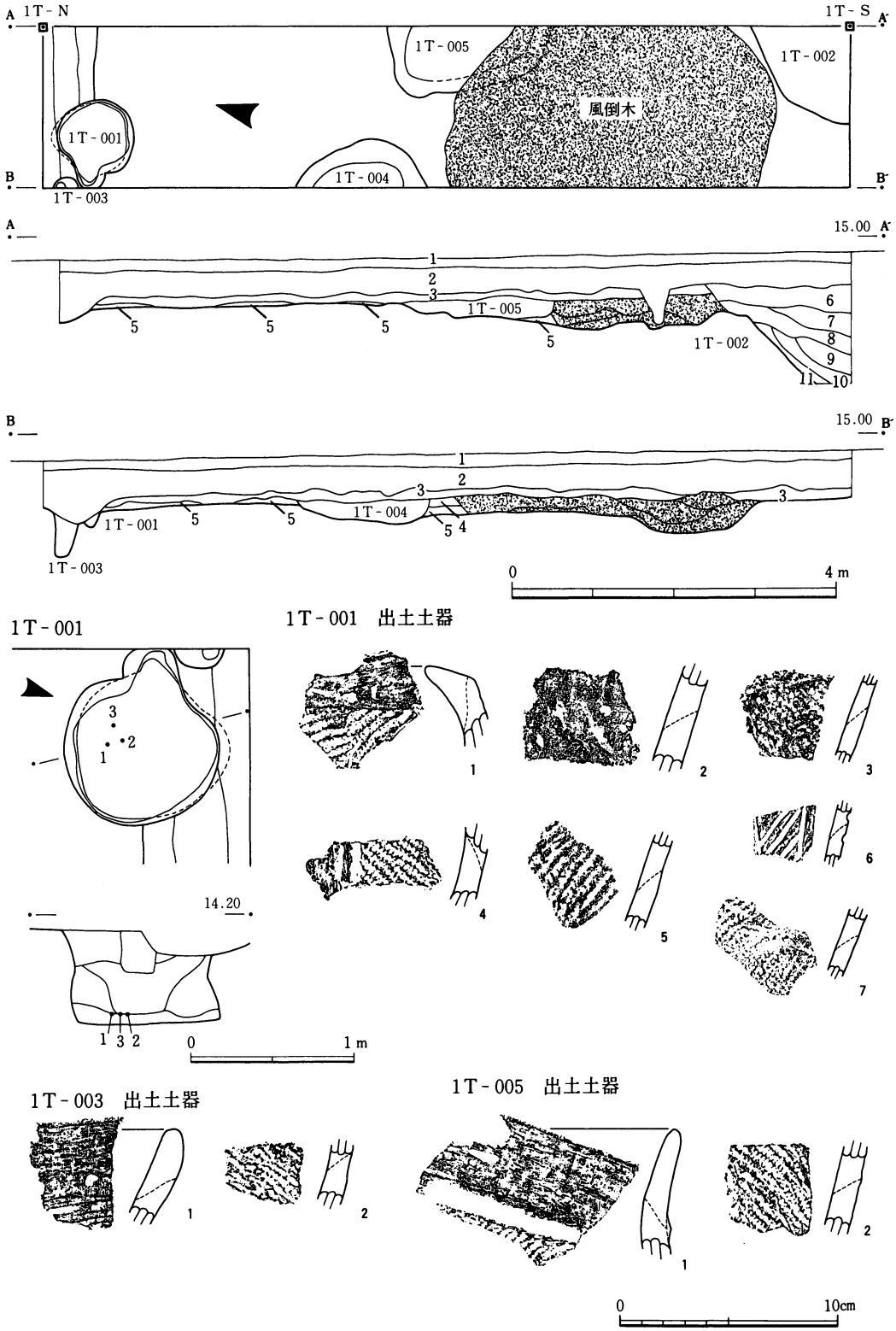
ボーリング探査の成果に基づき貝層の調査のために設定したが、過去（10年以上前）に天地返しが行われており貝層は攪乱されていた。攪乱層の下位には一部わずかではあるが茶褐色土が遺存し、加曽利E～堀之内式期の土器が多量に包含されていた。

遺構としては、貝層の西側で土坑やピット計5基を検出した。001と005は掘方が不安定であり遺構であるかどうか疑わしい。遺構内からは遺物は出土しておらず、時期は不明である。

3．第3トレンチ

調査対象範囲の西端付近に東西方向に設定した。最も標高の高い平坦面である。トレンチャーによる耕作の痕が縦横に走っているため遺構確認は困難を極め、検出には至らなかった。両壁ともトレンチャーにかかっていたため、セクション図を作成するため南側へ35cm拡張した。

地表から30cmほどが現在の耕作土（1層）で、下方の7cm～8cmは転圧のためかやや締まっている（2層）。その下位には15cmほどの層厚を持つ茶褐色土（3層）が堆積していた。この層はトレンチャーに切られており、過去に耕作されたような痕跡は認められなかった。ローム層の堆積状況を知るためにトレンチャーの一部を掘削してみたところ、全体にソフト化しているものの3層直下にはガラス質の粒子を含む淡黄色ローム層（4層）が、その下位には暗黄褐色ローム層（5層）が堆積していた。関東ローム層VI層とVII層上部に相当するものと思われる。


1T-N
1T-S
1T-005
1T-002
風倒木
1T-001
1T-004
1T-003
15.00
1T-005
1T-002
1T-001
1T-004
1T-003
0
4m
1T-001
1T-001 出土土器
14.20
0
1m
1T-003 出土土器
1T-005 出土土器
0
10cm

第4図 1T

4．第4トレンチ

調査対象範囲の東端に東西方向に設定した。野々下貝塚の形成に重大な役割を果たした溺れ谷の最深部に当たり、台地上とは約1mの比高差がある。

1・2層は現耕作土で、2層はやや締まった床土状である。3層と4層は旧耕作土で、鉄片や陶磁器片が出土することから近世以降の層と思われる。5層は極端に粘性の強い黒褐色土で、一定期間安定した耕作面であったためか4層との境界は不整合である。5層の下位の粘性の強い黄褐色土がローム層であるか否かの判断がつかなかったため、トレンチ西南隅を試掘して断面観察を行った結果ローム層であることを確認した。ローム層は上半部が明黄褐色土層（6層)、下半部がやや暗い黄褐色土層（7層）であった。水の影響のせいか軟らかく全体に粘性が強いため断定できないが、7層は立川ローム第2黒色帯（Ⅶ層又はⅨ層）と思われる。6層上面には5層がブロック状に10cmほど嵌入していることから耕作が行われていた可能性がある。この付近のレベルから堀之内～加曽利B式にかけての土器が、ややまとまって出土した。ローム層の下位は（8層）粘性が強く砂を含む暗灰色の粘土層で、成田層に対比されよう。

5．第5トレンチ

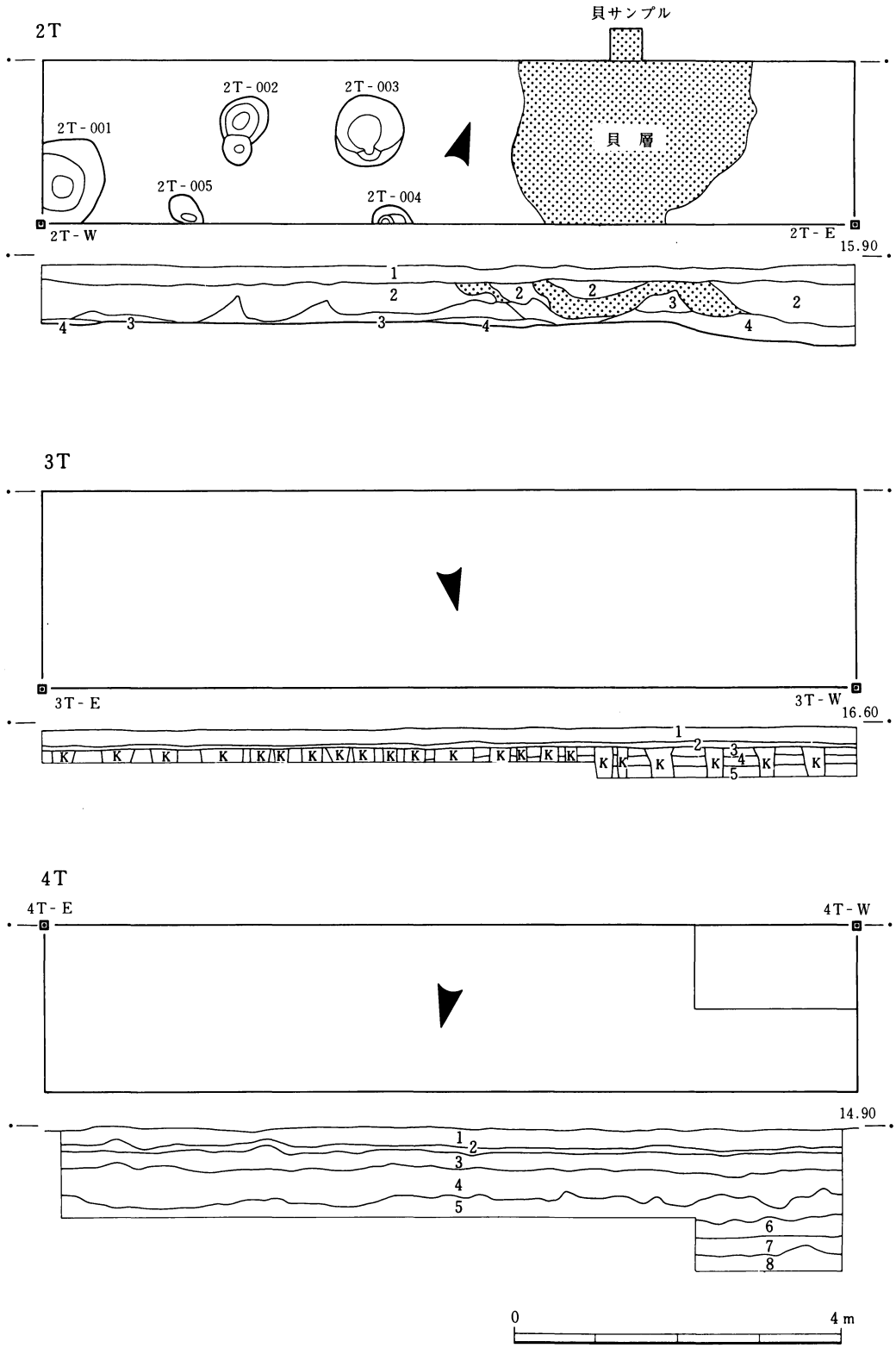
調査対象範囲の南端付近に南北方向に設定した。地表面がかなり黄褐色を帯びていることから耕作がローム層に達していることが予想され、また周辺には遺物もほとんど散布していないことから遺構が検出される可能性は低いものと思われた。予想どおりローム層以上はすべて耕作土で、耕作はハードロームにまで及んでいることが判明した。第Ⅰ章で触れた理由により北側へ4m拡張したが、近年のイモ穴2基を検出するにとどまった。

6．第6トレンチ

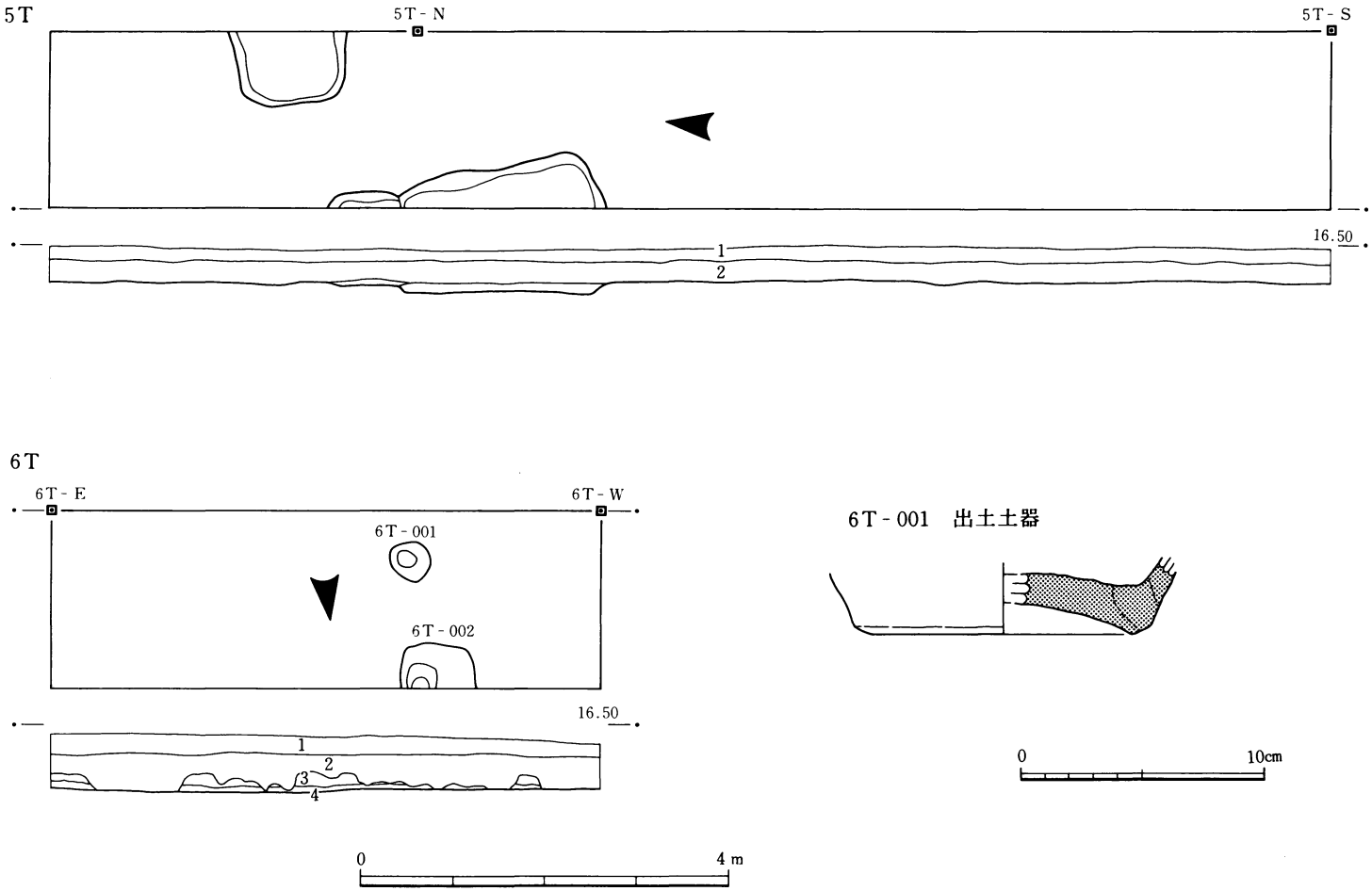
3Tの攪乱が激しかったため、農道をはさんだ東の県有地内に新たに設定した。過去は2Tと所有者が同一であり、ここも天地返しを受けていた。ローム層上面で遺存状況の悪い2基のピットを検出したが、001からは黒浜式土器の底部破片が出土した。

第2表　トレンチ別土器出土量　（単位：個、g）

	第Ⅰ群		第Ⅱ群		第Ⅲ群		第Ⅳ群		第Ⅴ群		不明		合計	
	数量	重量	数量	重量	数量	重量	数量	重量	数量	重量	数量	重量	数量	重量
1T	2	28	26	527	101	2349	166	1865	1	14	369	2435	665	7218
2T	7	178	265	6430	454	10365	195	2120	8	144	739	5484	1668	24721
3T	2	13	0	0	1	23	6	51	0	0	4	25	13	112
4T	0	0	27	625	140	2164	366	4218	37	648	707	3906	1277	11561
5T	2	27	0	0	0	0	10	79	0	0	13	66	25	172
6T	1	21	4	64	10	198	28	285	0	0	58	445	101	1013
合計	14	267	322	7646	706	15099	771	8618	46	806	1890	12361	3749	44797


2T
貝サンプル
2T-001
2T-002
2T-003
2T-004
2T-005
貝 層
2T-W
2T-E
15.90
3T
3T-E
3T-W
16.60
4T
4T-E
4T-W
14.90
0
4m

第5図　2T・3T・4T


5T
5T-N
5T-S
16.50
1
2
6T
6T-E
6T-W
6T-001
6T-002
16.50
1
2
3
4
0
4m
6T-001 出土土器
0
10cm

第6図　5T・6T

Ⅲ．出土遺物

1．縄文土器

今回の調査では、総数3,749点、総重量44,797gの縄文土器を得ることができた。埋蔵文化財分布地図では野々下貝塚から出土する縄文土器の型式として黒浜式、加曽利E式、堀之内２式、加曽利Ｂ式、姥山Ⅰ・Ⅱ式が挙げられているが、今回の調査で得られた土器も概ねこれらと同時期のものが大半を占めており、事実を追認することとなった。

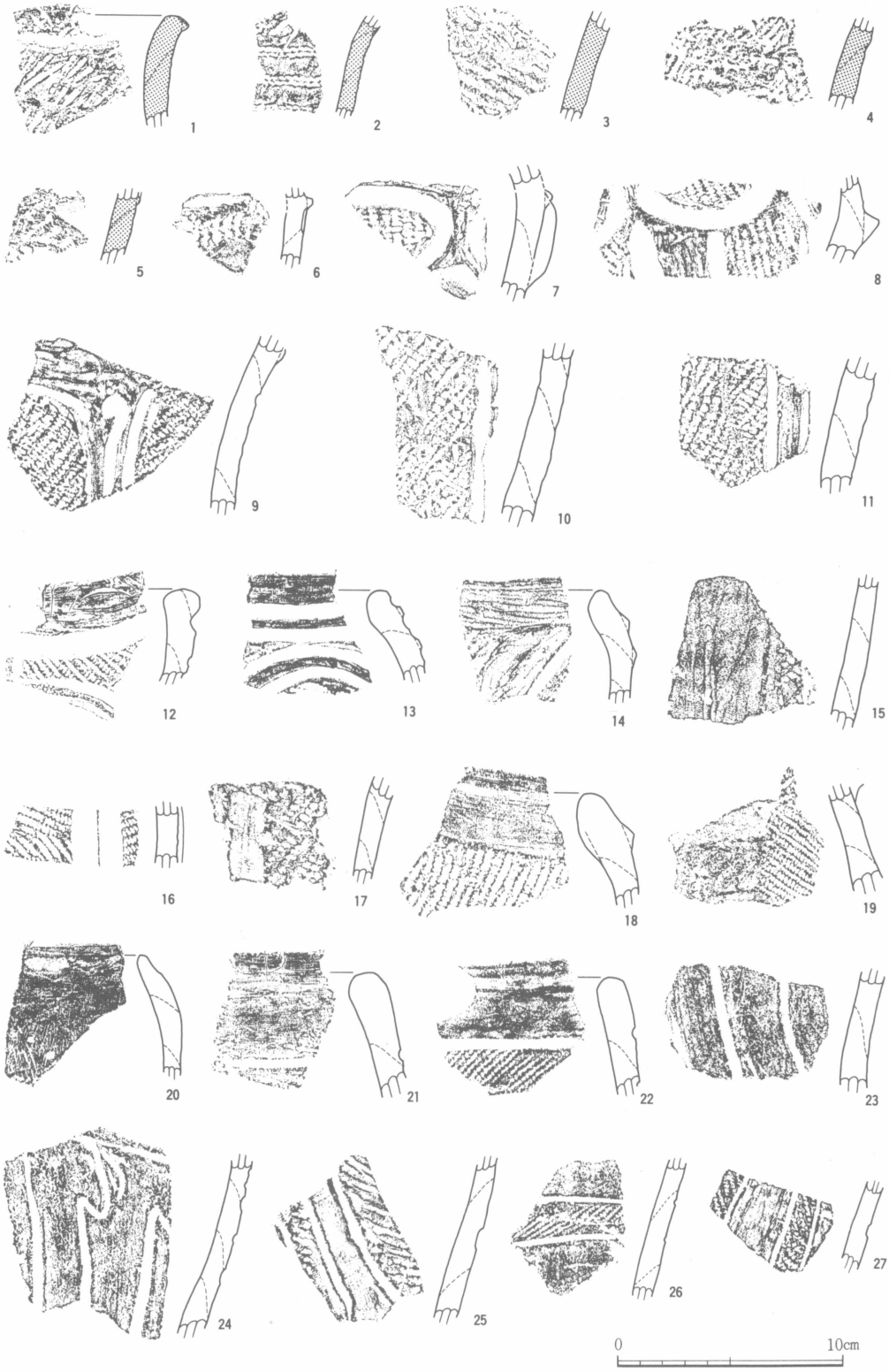
出土遺物を提示するに当たって、便宜上以下の各群に大別する。なお、第２表にトレンチごとの各群土器の出土量を示しておく。

第Ⅰ群　縄文時代前期の各型式
第Ⅱ群　縄文時代中期の各型式
第Ⅲ群　称名寺式・堀之内式
第Ⅳ群　加曽利Ｂ式・安行１・２式
第Ⅴ群　縄文時代晩期の各型式

第Ⅰ群（第７図、図版６）

縄文時代前期の諸型式を本群とする。総数14点、総重量267gと少なく、これらはすべて前期前半の黒浜式に含まれるものである。先述のとおり1.5kmを隔てて幸田貝塚が所在しており、何らかの関係があったのは確実であろう。前章で示したとおり、６Ｔからは該期の所産と思われるピットを検出しており、集落が形成されていた可能性もある。５点を図示した。

１は外反しながら開く口縁部破片で、口唇外面に細い粘土紐を貼付して肥厚させている。肥厚部と胴部外面には、ハイガイの貝殻背面の押捺によってできた単節縄文と似た文様を施している。胎土中に含まれる植物繊維の量は少なく、比較的堅緻である。２は撚糸文の技法を採用したもので、１段Ｌの縄を２本１単位で軸に巻き、横位に回転させて施文している。２本１単位の各条は３単位遺存しており、その間隔は９～10mmと広い。破片上端にも縄による文様を看取できるが、回転施文か押捺施文かは不明である。植物繊維の混入量は少なく、焼成も良好である。３は１段Ｒの横回転施文による無節縄文を持つ胴部破片である。植物繊維の混入量は多いが、焼成は良好で堅緻である。４はLR単節縄文が横回転施文された胴部破片である。植物繊維を大量に含んでおりもろい。５はRL単節縄文が縦回転施文されており、施文後表面が乾燥する以前にナデられたために文様が不明瞭になっている。破片下端には半截竹管の横断面の刺突による馬蹄形の文様が横位に並んでおり、文様帯を画しているものと思われる。



第７図　遺構外出土土器（1）

第II群（第７図、図版６）

縄文時代中期の諸型式を本群とする。322点、7,646gが出土した。15点を図示した。

６は阿玉台式の範疇に含まれるものであるが、この１点しか出土していない。横位に隆線を貼付し、下位にアナダラ属貝殻腹縁を連続押捺している。このような手法にアナダラ属の貝殻が使用される例は稀である。

残る13点はすべて加曽利E式で、いずれもEIII式以降の後半期のものである。７～11はいわゆるキャリパー形土器である。７と８には口縁部文様帯が遺存しているが、いずれも胴部懸垂文との癒着傾向がうかがえ、また９は磨消懸垂文を描く沈線が縄文施文部上で弧状に連結することにより懸垂文効果が縄文施文部に移行している。これらは加曽利EIII式期の特徴といえる。９では磨消懸垂文内に蕨手状の沈線が垂下し、３本の平行沈線状になっている。12・13・16は、主文様が両サイドに沈線の付随する隆線によって描かれるもので、渦巻文系の土器と思われる。この手法も加曽利EIII式期の特徴である。14・15・17は横位連繋弧線文系の土器である。口縁部ヨコ１次区画と弧線文の癒着や隆線と縄文施文部との関係から判断して加曽利EIV式であろう。19は壺形土器と思われる。破片上端には橋状把手が付されていた痕跡がある。

第III群（第７～９図、図版６～７）

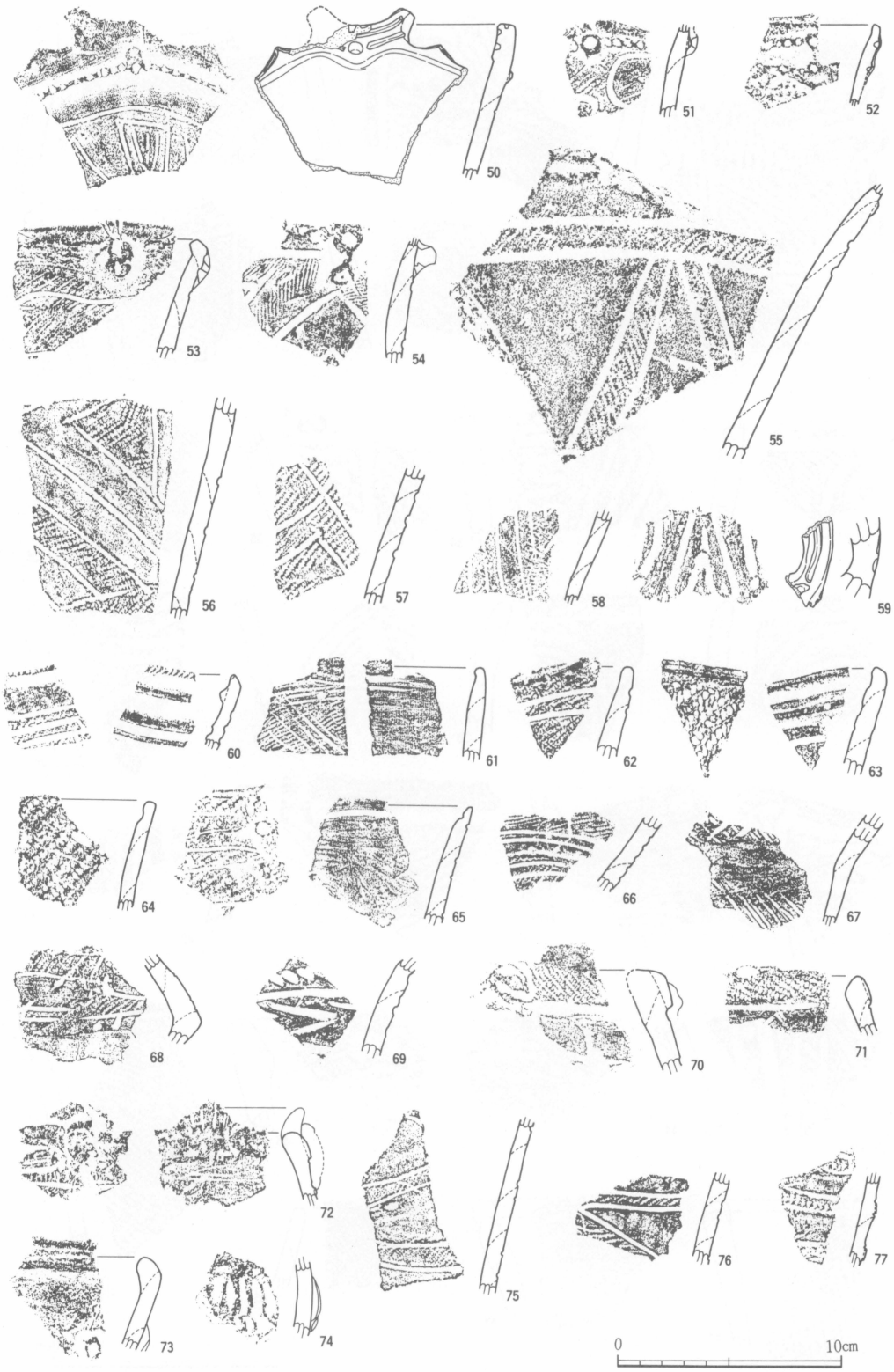
縄文時代後期前半の称名寺式、堀之内式を本群とする。総数は706点と第IV群よりわずかに少ないが、総重量では15,099gと突出している。本遺跡の主体をなしていると言えよう。

21～27の７点は称名寺式である。21・23・24の３点は縄文を伴わず、残る４点は縄文を伴っているが、全体の文様構成がわからないため細別時期はわからない。

28～59の33点が堀之内式で、うち23点（28～49）が堀之内１式の範疇に含まれる。野々下貝塚の主体をなす型式である。28～32は口縁部に無文帯を持ち平行沈線間を磨消した懸垂文が垂下するもので、28と29は同一個体である。28や32のように文様帯を画する沈線が引かれるのが一般的であるが、31にはみられない。33～36は１条の沈線が様々な形状で懸垂文となっているものである。37～40は胴部文様帯に同心円状の文様が配されるものである。41～46は胴部文様帯を隆線によって画するもので、41では明瞭な口縁部文様帯が配されている。また、43は隆線に付随して円形竹管が刺突される稀有な例である。45は無文の波状口縁深鉢で、波頂部の口縁内面は円形に抉り取られている。46と47はラッパ形に開く器形で器面に縄文のみが施されたもの、48と49は器面に条線のみが施されたもので、該期の粗製土器の一種と言えよう。

50～58は堀之内２式に属するものである。50～54には該期の特徴である８の字状突起が付されており、なかでも50～52には口縁部と平行に刻みを持つ隆線が廻っている。55～58は沈線による幾何学的な区画文が施された胴部破片で、57をのぞき磨消縄文の手法が採用されている。59は注口土器に付された橋状把手と思われる。堀之内１式か２式かははっきりしない。

第８図　遺構外出土土器（2）



第９図　遺構外出土土器（3）

第IV群（第９～10図、図版８）

後期後葉の加曽利Ｂ式～安行２式を本群とする。771点、8,618gと第III群に次いで多く出土しているが、約半数は４Ｔで出土した流れ込んだ可能性の高い資料で、まとまって出土したという印象は薄い。28点を図示した。

60～66は加曽利Ｂ１式と思われる資料である。60は口唇に微細な刻みを持ち表面に３段以上の幅狭横帯文が、裏面にも幅狭横帯文が施された波状口縁精製深鉢である。61～64は半精製土器とも言うべきもので、63の裏面に粗雑ながら幅狭横帯文が配されるほかには典型的な文様は施されていない。65は口縁外面に８の字状突起が付されており、堀之内式の系統をひく古い段階のものと思われる。66はかなり強く開くことから浅鉢である可能性がある。やや粗雑ながら幅狭横帯文が施されることからここに提示した。67は胴部にくびれを持つ深鉢で、くびれ部が無文となり上下に条線が施されている。加曽利Ｂ２式であろう。68は算盤玉状の器形を呈する浅鉢と思われる。表面が磨滅しておりはっきりしないが、くの字状の突出部以上に縄文施文帯と沈線による磨消区画帯が配され、以下が無文になるようである。69は深鉢の胴部破片で、横走する刺突列と矢羽状の沈線が遺存している。

70～77は安行１式ないし２式に含まれるものである。70～72は横帯文系の土器で、72は口唇と区画部に突起が付された１段の横帯文を有する。72は横帯文が刻文で画されることから安行２式と思われるが前２者は不明である。73は文様構成は不明であるが、破片下端にブタ鼻状突起が付されている。74はブタ鼻状突起のみが遺存した小破片である。いずれも安行２式であろう。75～77は波状口縁深鉢であると思われるがはっきりしない。77は刻文帯であることから安行２式であろう。

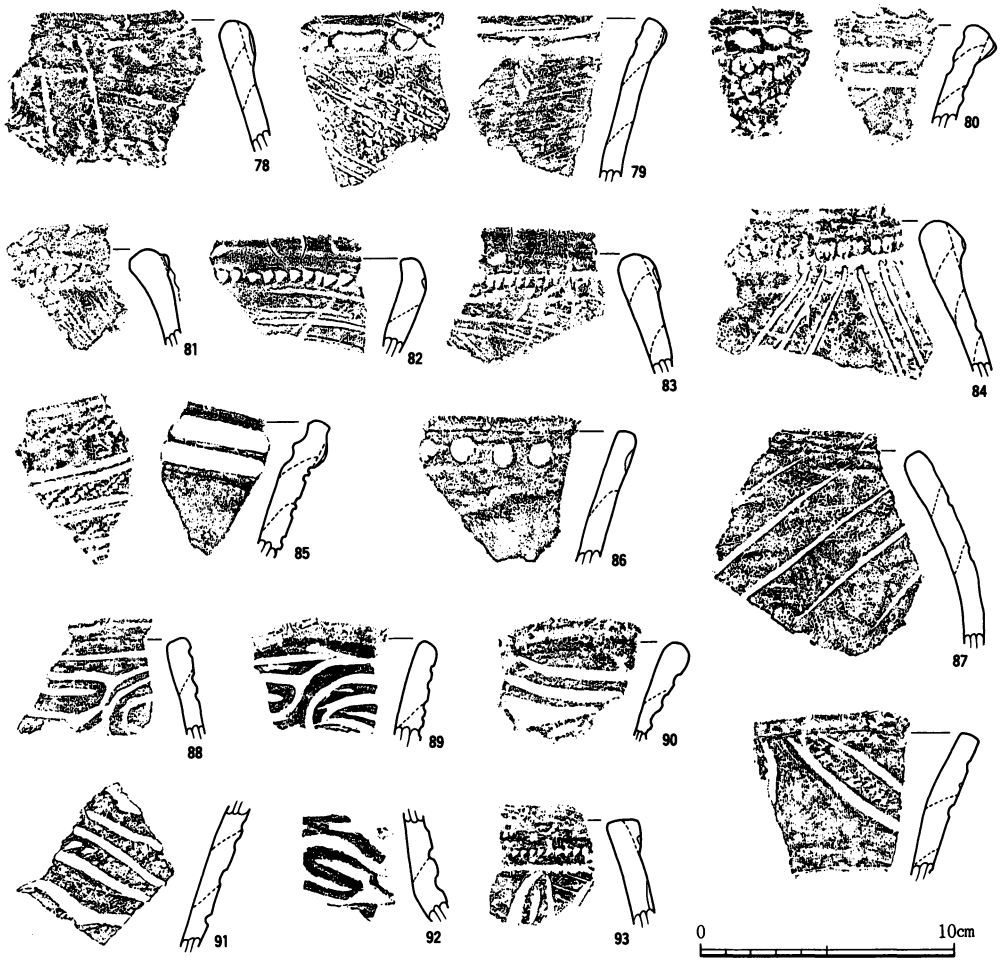
78～85はいわゆる紐線文系土器である。地文には条線のみのもの、縄文のみのもの、両者が併用されるもの等のバリエーションがある。85は地文に縄文を用い、口縁と平行に半截竹管による平行沈線を施したものもある。84は晩期まで下るかもしれない。

86と87は紐線文系土器の範疇に含まれない粗製土器である。86は口縁直下に円文が廻っており、87は右上がりの斜沈線が広い間隔で施されている。後者は加曽利Ｂ２式であろう。

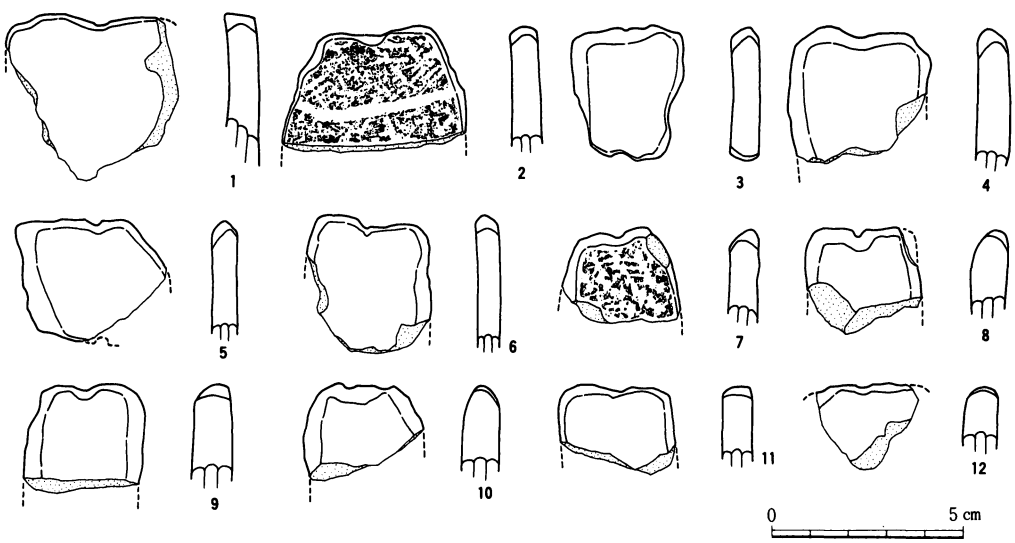
第Ｖ群（第10図、図版８）

縄文時代晩期の諸型式を本群とする。46点、806gと少なく、晩期の後葉まで下るものは含まれていない。７点を図示した。

88～92は三叉文を基本とするものである。個体識別は充分でないが、同一個体も含まれていよう。三叉文がかなり入り組んでおり縄文施文が消滅していることから安行３c式と思われる。94も縄文施文帯が列点文に置換されていることから安行３c式であろう。93は当該期の紐線文系の土器で、未だ加飾されていることから安行３a式段階と思われる。



第10図　遺構外出土土器 (4)



第11図　遺構外出土土製品

2．土製品（第11図、図版８）

今回の調査で出土した土製品は、第11図に示した土器片錘12点である。後述するとおり、採集した貝サンプル内には小形魚のものと思われる魚骨が少量ながら含まれていたことから、漁撈具としての土器片錘の存在を想定して詳細にチェックしたが、この12点しか含まれていなかった。なお、明らかに土器片錘であると判断できるのは３・５・７・８・９の５点のみで、ほかの７点はその可能性があるという程度であることを明言しておく。器面の磨滅しているものが多いため使用された土器の時期ははっきりしないが、器厚や胎土の特徴から判断すると加曽利E式から加曽利Ｂ式までの長い期間、製作、使用されていたものと思われる。

3．石　器（第12～13図、図版９）

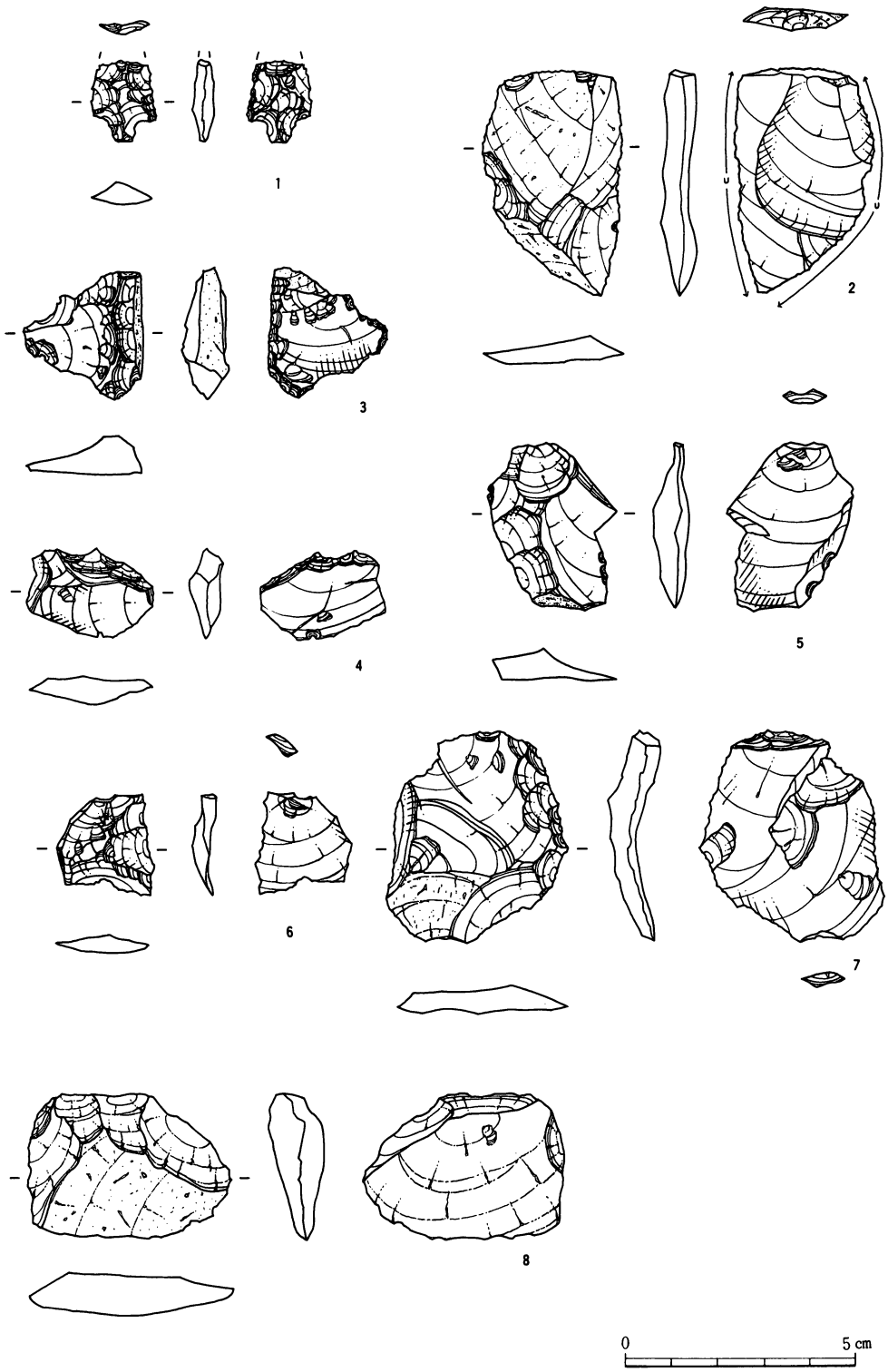
石斧や磨石、敲石等の調理具、工具は出土しているが、剥片石器がわずかであるという特徴が挙げられよう。前者は図示したもののほかにも存在しており比較的遺存度の良いもののみを示したが、剥片石器は図示した８点ですべてである。

１は先端を欠損する有茎石鏃である。４Ｔの旧表土中から出土したものであり、野々下貝塚の集落との関連は不明である。２はチャートの使用痕のある剥片、７はメノウの２次調整剥片で、最大計測値が50mmに近い大形のものはこの２点のみである。その他３～５は５の35.5mmを最高に概して小形で、３のように外皮部の残る資料もあることから、比較的近接する江戸川や利根川の河原で得られる小礫を使用している可能性が高い。なお、せまい範囲でチャートや黒曜石のチップを数点表採した地点があり、製作跡が存在する可能性も考えられる。

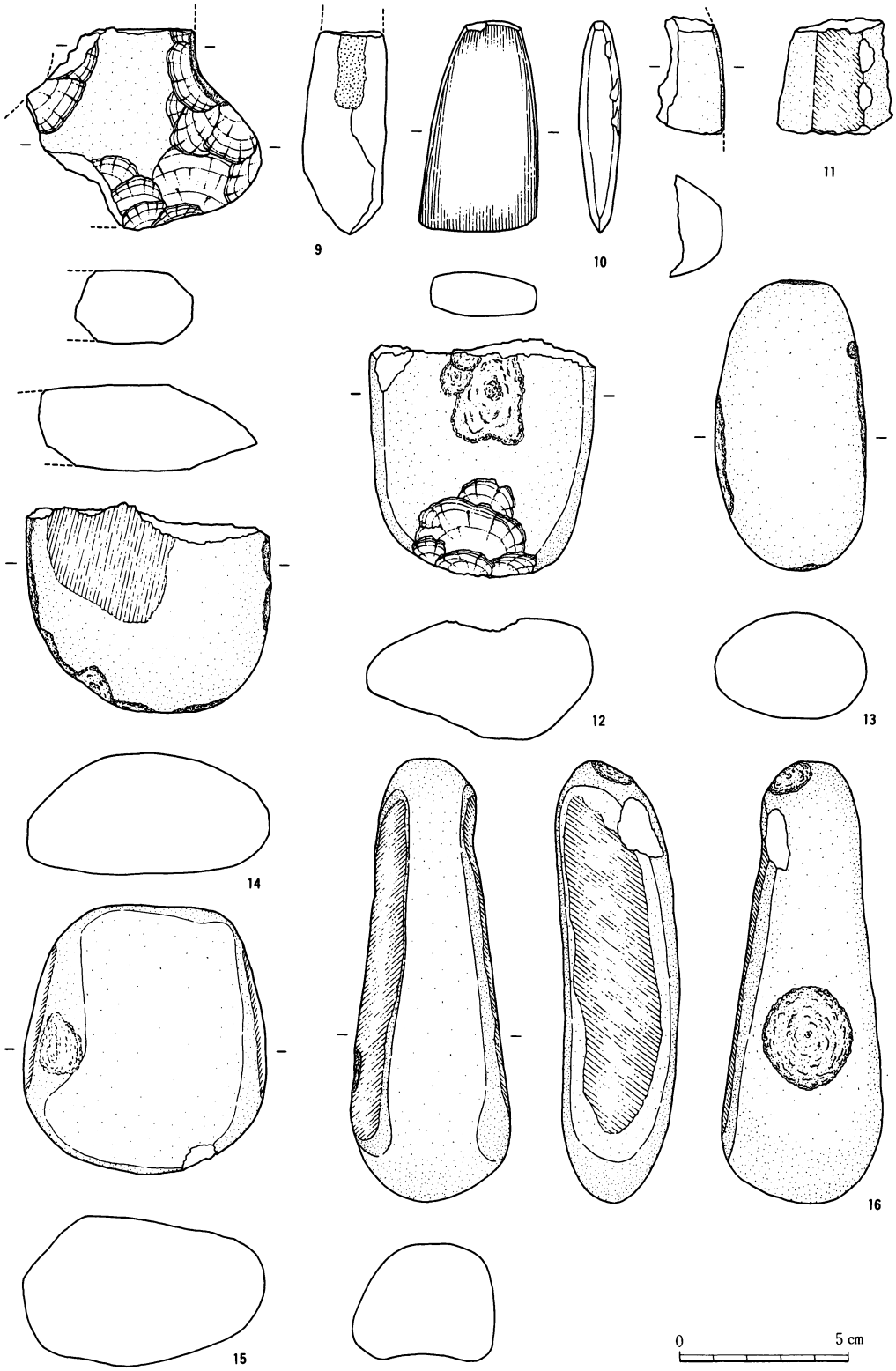
礫石器で特筆すべき点として、15が１面を除いて被熱赤化している点が挙げられる。敲石や磨石の機能を失った後に、地面に置かれて調理用に使用されたのだろうか。

第３表　出土石器観察表　（単位：mm・g）

No.	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1	4T	石鏃	チャート	17.6	13.9	11.5	1.1	有茎
2	2T	U剥片	チャート	49.0	30.1	7.8	9.5	
3	4T	R剥片	珪質頁岩	27.5	25.3	10.5	5.0	
4	2T	R剥片	チャート	18.6	22.9	7.5	3.0	
5	2T	R剥片	チャート	35.5	28.5	7.6	5.2	
6	1T	R剥片	チャート	21.2	21.5	5.2	1.5	
7	2T	R剥片	メノウ	47.5	39.7	11.8	13.1	
8	1T	剥片	変成岩	33.0	44.7	12.0	14.9	
9	1T	打製石斧	砂岩	62.0	70.8	25.0	129.4	
10	表採	磨製石斧	蛇紋岩	63.2	35.1	13.0	44.0	
11	4T	磨製石斧	砂岩	35.3	20.5	33.7	26.6	
12	表採	敲石	安山岩	69.8	68.2	36.5	235.3	礫器として使用
13	4T	敲石	安山岩	84.8	45.0	31.0	187.4	
14	1T	敲・磨石	石英斑岩	61.0	73.3	34.5	230.6	
15	表採	敲・磨石	石英斑岩	78.5	72.5	43.5	339.4	一部被熱赤化
16	2T	敲・磨石	砂岩	129.5	47.3	37.5	806.9	



第12図　遺構外出土石器 (1)



第13図　遺構外出土石器 (2)

4．貝サンプル

第II章で触れたとおり、第2トレンチで調査した貝層は耕作に伴う天地返しによって攪乱を受けたものであったが、動いてはいるものの貝は比較的まとまったまま遺存していたため貝サンプルを採集した。ただし攪乱されていることが明らかであったことから、従来一般的に行われている垂直コラムサンプルの方法は無意味と思われたため採用せず、第4図に示した範囲にある貝をブロック状に一括して取り上げた。採集の目的は貝類の組成や獣骨、魚骨等の動物遺存体の有無を確認することにおくこととした。

サンプル中に含まれていた貝類のうち同定された種は第4表のとおりである。なお、同定作業に当たって当センター主任技師西野雅人の教示を得た。野々下貝塚ではこれまでに貝サンプルが採取・分析された例がないため、地表観察によって同定されていたものにかなりの種が追加されることとなった。今回同定された種類は砂泥性の鹹水産種が大半を占めており、個体数的にもアサリやハマグリをはじめとする湾奥砂底性の種類が優位である。後述するように坂川流域の沖積低地では縄文海進期にカキ礁が形成されていたことが判明しているが、今回サンプル中に現れたマガキの個体数は4点とわずかであった。なお、表示したもののほかに微少な陸産貝も数種類同定されたが、貝層が攪乱されていることから、ごく最近のものが混入している恐れがあるため除外した。

貝類のほかに、小形魚のものと思われる椎骨や微小骨が少数とクロダイかと思われる角骨や歯、うろこ等も含まれていたが、種の同定には至っていない。今後機会を改めて報告したい。なお獣骨と思われるものは、被熱によって焦げた、関節部と思われる小片がわずかに2点含まれているのみである。遺存度も悪く、今後も同定できる可能性は低い。

第4表　貝類種名一覧及び組成表

		個体数(%)		重　量(%)	
腹足綱　GASTROPODA					
ウミニナ科種不明	Potamididae gen. & sp. indet.	2	0.1	0.1	0.0
アカニシ	*Rapana venosa*	9	0.5	422.5	6.6
マルテンスマツムシガイ	*Indomitrella martensi*	1	0.1	0.1	0.0
アラムシロ	*Reticunassa festiva*	3	0.2	0.3	0.0
二枚貝綱　BIVALVIVA					
サルボウガイ	*Scapharca subcrenata*	72	3.9	402.3	6.3
マガキ	*Crassostrea gigas*	4	0.2	21.6	0.3
シオフキガイ	*Mactra quadrangularis*	198	10.8	703.9	11.0
マテガイ	*Solen strictus*	7	0.4	4.2	0.1
ヤマトシジミ	*Corbicura japonica*	13	0.7	6.7	0.1
カガミガイ	*Phacosoma japonicum*	2	0.1	9.7	0.2
アサリ	*Ruditapes philippinarum*	650	35.5	1945.7	30.3
ハマグリ	*Meretrix lusoria*	511	28.0	1280.1	19.9
オキシジミ	*Cyclina sinensis*	20	1.1	38.5	0.6
オオノガイ	*Mya arenaria oonogai*	335	18.3	1585.4	24.7
合　　計		1827	99.9	6421.1	100.1

Ⅳ．まとめ

1．野々下貝塚の遺跡範囲と形成時期

今回の調査の最大の目的は遺跡範囲の確認であった。貝層の分布する範囲を見ると、遺跡中央の浅い溺れ谷の西側の、16mのコンタライン付近に集中していることがわかる。この溺れ谷の谷頭は北西から開析された支谷の谷頭と接しており、調査範囲の中央を走る農道付近を分水嶺としているが、この北西側の谷に関連した貝塚は形成されていない。調査範囲の東側にある工場付近も標高は16m～17mであり、地元の方の話で旧来はそちらにも貝殻が散布していたということであるから、溺れ谷をはさむように弧状に展開する地点貝塚が向かい合っていたものと思われる。工場のさらに東側にも標高16m以上の平坦面が続くが、調査期間中２度にわたる踏査を行ったにもかかわらず、この付近では貝殻の散布を確認することはできなかった。調査範囲内でも分布域は広い幅を持たないことから、貝層は溺れ谷と密接に関連してかなり限定された範囲に形成されたものと思われる。

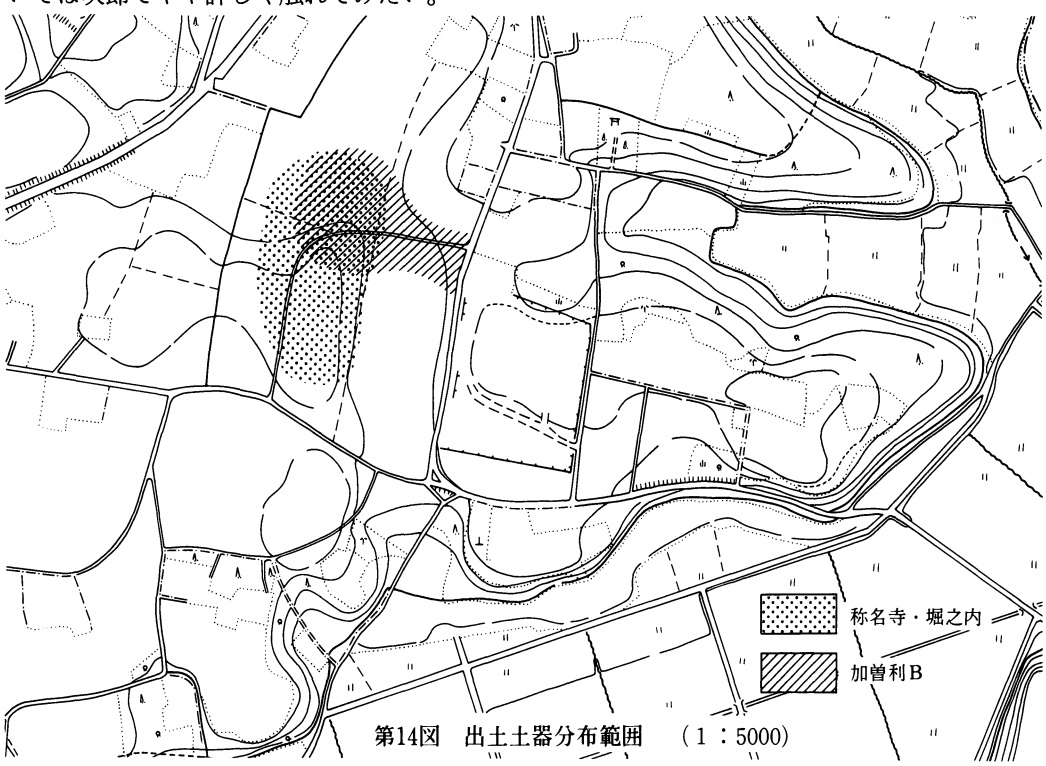
貝層を形成した集落については、本来貝層外側の周辺部に展開するのが一般的であるとされている。野々下貝塚でも貝層のすぐ内側(東)が溺れ谷に面する斜面となっており、ボーリング探査の成果から旧来はさらに比高差が大きかったことが判明しているので、こちら側に集落が展開していた可能性は極めて低い。今回の調査では住居跡は検出できなかったが、これはトレンチの設定位置が調査範囲の末端付近であることに起因すると思われ、集落は貝層の外側(西)縁辺部に展開しているものの広範囲には及ばないのであろう。この推定は、遺物の分布の濃淡の状況からもある程度傍証することができる。第14図に遺物の分布状況を示したが、その範囲は決して広いとは言えない。貝層の集中する部分から調査区北端の１T付近にかけてはかなり濃密な散布が認められ、調査範囲の限界を越えて北側まで遺跡が広がっている可能性が高い。反対に西側の３Tより南側や南の５T付近では地表面での遺物散布もほとんどなく、さらには耕作がローム層にまで及んでいるため遺構の遺存している可能性は低いだろう。この傾向は第２表に示した土器数量を見ても明らかである。４Tでは遺物の出土量は多いが、これは旧表土中に流れ込んだものが大半を占めている。

調査範囲の東側の工場部分まで遺跡が展開していたことは確実であるが、現状では詳細を検討することはできない。過去の調査例を見ると、JA八木の倉庫建設に伴って流山市教育委員会が調査した野々下篠塚遺跡では加曽利Ｂ式期の埋甕が検出されており、台地東側の貝層に関連する生活痕である可能性がある。また、未だ公表されていないが今回の調査区の東端を走る市道の拡幅工事に伴って実施された流山市教育委員会による調査の際には、竪穴住居跡１軒と住居内に堆積した貝層２地点が検出されている。これは東側に展開するはずの貝層に関連する遺構であろう。(＊この成果については、調査を担当された流山市教育委員会社会教育課、増崎勝仁氏よ

り資料を実見させていただいた。記して感謝の意を表します。)

続いて、遺跡の形成時期について検討してみたい。出土した縄文土器の型式を見ると、前期黒浜式、中期阿玉台式・加曽利E式、後期称名寺式・堀之内式・加曽利B式・安行1・2式、晩期安行3a・c式が挙げられる。6T－001の存在からみて初現は黒浜式期といえるが、出土総点数でも8点に過ぎず、定住集落であった可能性は低い。この地に集落ができ、野々下貝塚が形成されるに至ったのは、古くても加曽利E式後半期である。この集落は称名寺式期を経て堀之内式期まで、さほど変化せずに連綿と存続したものと思われる。これら3型式の分布の濃い範囲と貝層の分布範囲との一致もこれを裏付けている。坂川流域では縄文時代後期に形成された貝塚は純鹹ないしは主鹹であることが知られているが、今回の貝サンプルのデータもそれを追認している。

加曽利B式の主たる分布範囲は、加曽利E式～堀之内式段階とは異なっている(第14図)。すなわち1T付近から東へ伸びており、溺れ谷西側の貝層分布地点とは一致しないのである。今回の調査で確認した貝の表面散布の中にはシジミ類を主体とするものはなかったが、先述の流山市の調査で検出された遺構内貝層2地点のうち1地点はヤマトシジミを主体とするものであったとのことである。周辺地域をみると、後期末から晩期前葉に形成された貝塚、例えば流山市上新宿貝塚や松戸市貝の花貝塚は汽水産のヤマトシジミを主体としている。坂川流域では加曽利B式期までに海退が進み、海水の影響が少ない状況になっていたのであろうか。この点については次節でやや詳しく触れてみたい。



第14図　出土土器分布範囲　(1：5000)

2．周辺の古環境との対比

第Ⅰ章でも触れたとおり、縄文海進期には坂川流域の沖積低地は海水で満たされており、地質学的に古流山湾と呼ばれる奥東京湾の支湾となっていた。こうした支湾は、大規模な河成作用の影響が少ないために沖積層の堆積過程が連続的に記録されており、環境変遷史の検討上良好な資料を提供する。

近年、古流山湾に関する環境変遷史の調査研究成果が相次いで発表された。ひとつは遠藤邦彦氏らによる研究である(遠藤他　1989)。これは、坂川の河川改修に伴って露出した沖積層上部の露頭の調査と周辺のボーリング試料の検討によりテフラやC^{14}年代による基本層序を確立し、珪藻、花粉、貝類群集、砂粒組成等の分析により環境変遷史の総合的な復元を行ったものである。もうひとつは松戸市立博物館の古環境展示のために塚越哲氏らによって行われたもので(塚越他　1994)、遠藤氏らの調査地点とはやや隔てた位置で同様の方法によっている。両研究ではほぼ同様の成果が得られているが、ここでは野々下貝塚の形成時期に近い年代について詳細に報告されている塚越氏らの成果との比較をしてみたい。

塚越氏らの研究では、約6,000年前から現在に至るまでを以下の4時期に分けている。なお、復元環境に関する所見は流山市名都借地区のものである。

1	5,300y.B.P.以前	縄文海進期の最盛期　水深3～5mの小湾
2	5,300～4,500y.B.P.	短期間で海退が進みデルタ地形を形成　前浜干潟的環境
3	4,500～3,500y.B.P.	海岸線が遠ざかり陸水の影響大　後浜干潟的環境
4	3,500y.B.P.以降	完全な陸成層　草本の生い茂る湿地帯

さて、野々下貝塚の形成時期の主体は縄文時代中期末から後期前半にかけてである。この時期の絶対年代は、多少の誤差はあろうが約4,000年前から3,500年前であり、塚越氏らの時期区分の第3期に当たる。名都借地区では既に海岸線が遠ざかり後浜干潟的環境に移行しているが、下流の芝崎地区付近ではカキ礁が形成されており、デルタ地形の前浜干潟的環境が残っている。こうした砂泥性の干潟で採集されるアサリ、ハマグリ等が優勢を占めていることから、採集位置は名都借よりも下流の、流山市芝崎や松戸市幸田付近の谷の幅が広くなっているあたりであろうと想像される。

加曽利B式から晩期前半にかけての絶対年代は約3,000年前の前後の時期であり、すでに完全に陸化し、湿原性草本の生い茂る地域となっていた。この時期にヤマトシジミを主体とする貝層が形成されるのは、海退によって海岸線がはるかに遠ざかり、日常的に鹹水産の貝類を採集することは困難になっていたためと想像される。前節で触れた上新宿貝塚や貝の花貝塚は野々下貝塚よりさらに上流に位置しており、汽水種への転換は早かったのであろう。

参考文献

千葉県教育委員会「千葉県埋蔵文化財分布地図（1）－東葛飾・印旛地区－」　1985年

千葉県教育委員会「千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書」　1983年

流山市教育委員会「流山の遺跡」－流山市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書－　1981年

流山市教育委員会「流山市市内遺跡群発掘調査報告」－昭和63年度－　1989年

流山市教育委員会「流山市市内遺跡発掘調査報告書」－平成２年度－　1991年

流山市教育委員会「流山市市内遺跡発掘調査報告書」－平成４年度－　1992年

柏市教育委員会　「柏の遺跡」－柏市埋蔵文化財分布地図－　1983年

松戸市教育委員会「松戸の遺跡」－松戸市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書－　1976年

塚越　哲ほか　「古流山湾の古環境の変遷」『松戸市立博物館調査報告書２』　1994年

遠藤　邦彦ほか　「千葉県古流山湾周辺域における完新世の環境変遷史とその意義」『第四紀研究』28　1989年

太田　文雄　「銚子市余山貝塚確認調査報告書」千葉県文化財センター　1989年

部　淳一　「横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書」千葉県文化財センター　1990年

出口　雅人　「千葉市誉田高田貝塚確認調査報告書」千葉県文化財センター　1991年

四柳　隆　「小見川町白井大宮台貝塚確認調査報告書」千葉県文化財センター　1992年

上守　秀明　「袖ヶ浦市山野貝塚発掘調査報告書」千葉県文化財センター　1993年

安井　健一　「野田市東金野井貝塚発掘調査報告書」千葉県文化財センター　1994年

報告書抄録

ふりがな	ながれやましののしたかいづかかくにんちょうさほうこくしょ
書名	流山市野々下貝塚確認調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第274集
編著者名	四柳　隆
編集機関	財団法人千葉県文化財センター
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2　Tel 043-422-8811
発行年月日	西暦1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ののしたかいづか 野々下貝塚	ちばけんながれやましし 千葉県流山市 ののした 野々下	12220	018	35度 51分 19秒	139度 55分 28秒	19941101 ～ 19941130	33,000	土地区画整理に伴う範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野々下貝塚	貝塚 集落	縄文	貝層　16か所以上 土坑　5基以上 ピット　4基以上	縄文土器（加曽利E・堀之内・加曽利B） 石器（石鏃・磨石・敲石）	溺れ谷を囲むように、孤状に地点貝塚が展開する。 貝層の形成時期も確認できた。

写　真　図　版

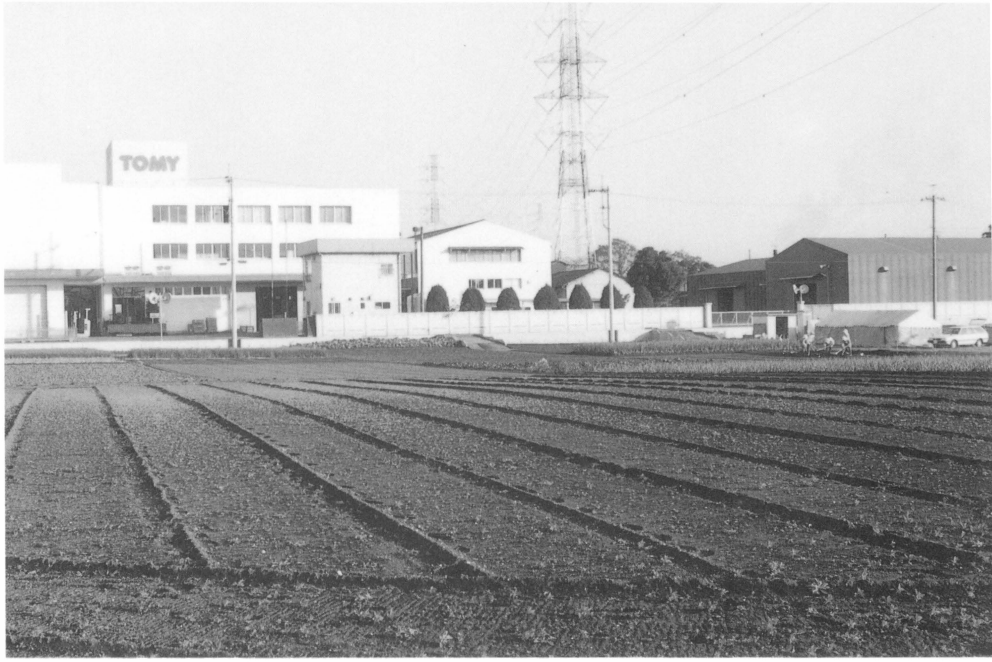
遺跡周辺の航空写真（約1:5,000）

1．南:芝崎方面から

2．東:名都借方面から

遺跡遠景

1．北から



2．西から

3．南東から

遺跡近景

1．1T全景（南から）

2．1T-001・003（東から）

3．1T-005（西から）

4．1T-002（北西から）

5．2T全景（東から）

6．2T貝層部分セクション

7．2T遺構検出状況（東から）

8．2T-003（南東から）

各トレンチの状況（1）

1．3T 全景（東から）

2．5T 全景（北から）

3．4T 全景（東から）

4．4T 西端付近セクション

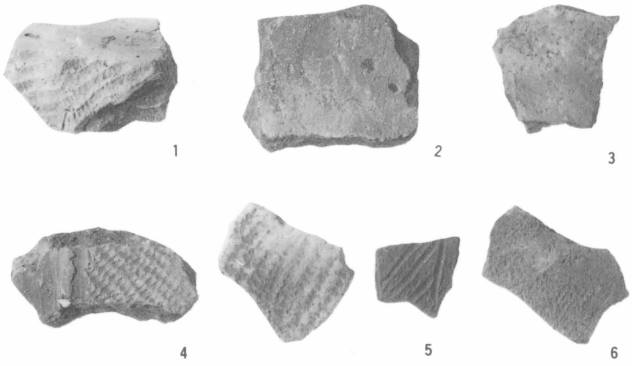
5．6T 全景（東から）

6．6T－001（北東から）

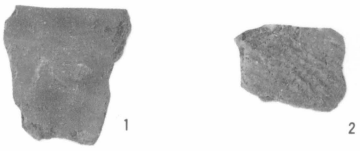
7．調査風景（トレンチ調査）

8．調査風景（ボーリング探査）
各トレンチの状況（2）

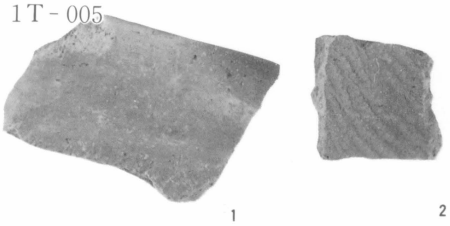
1T-001

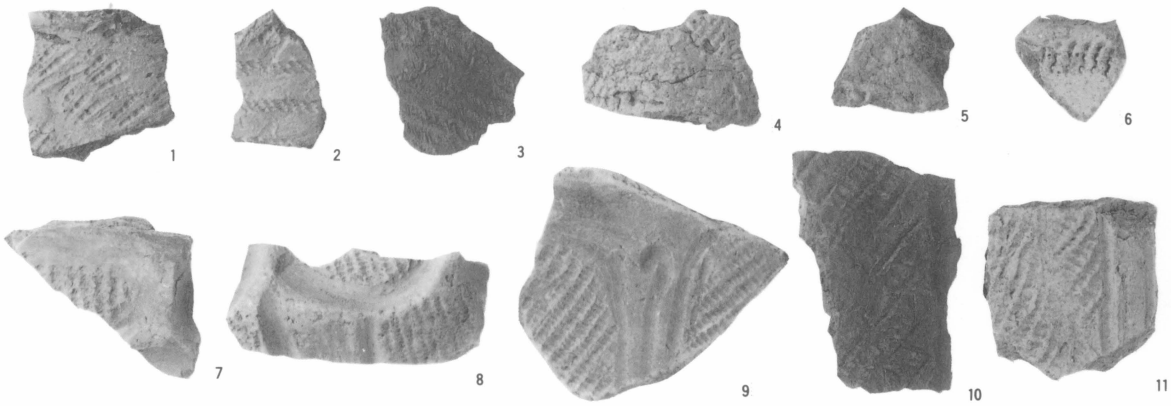


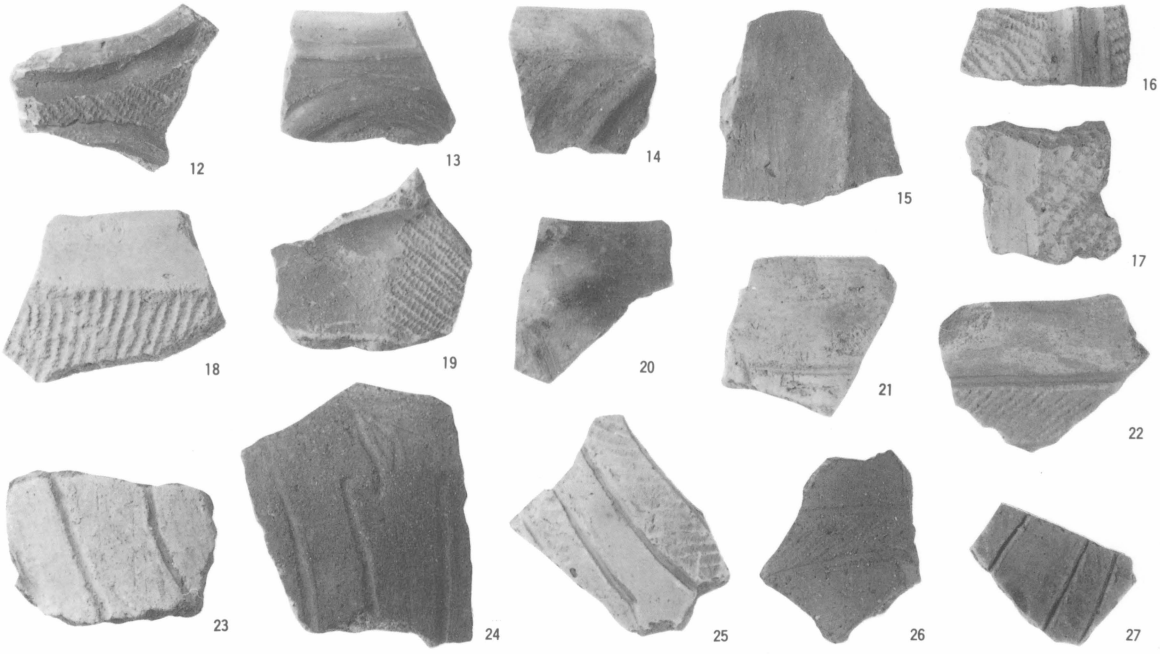
1T-003



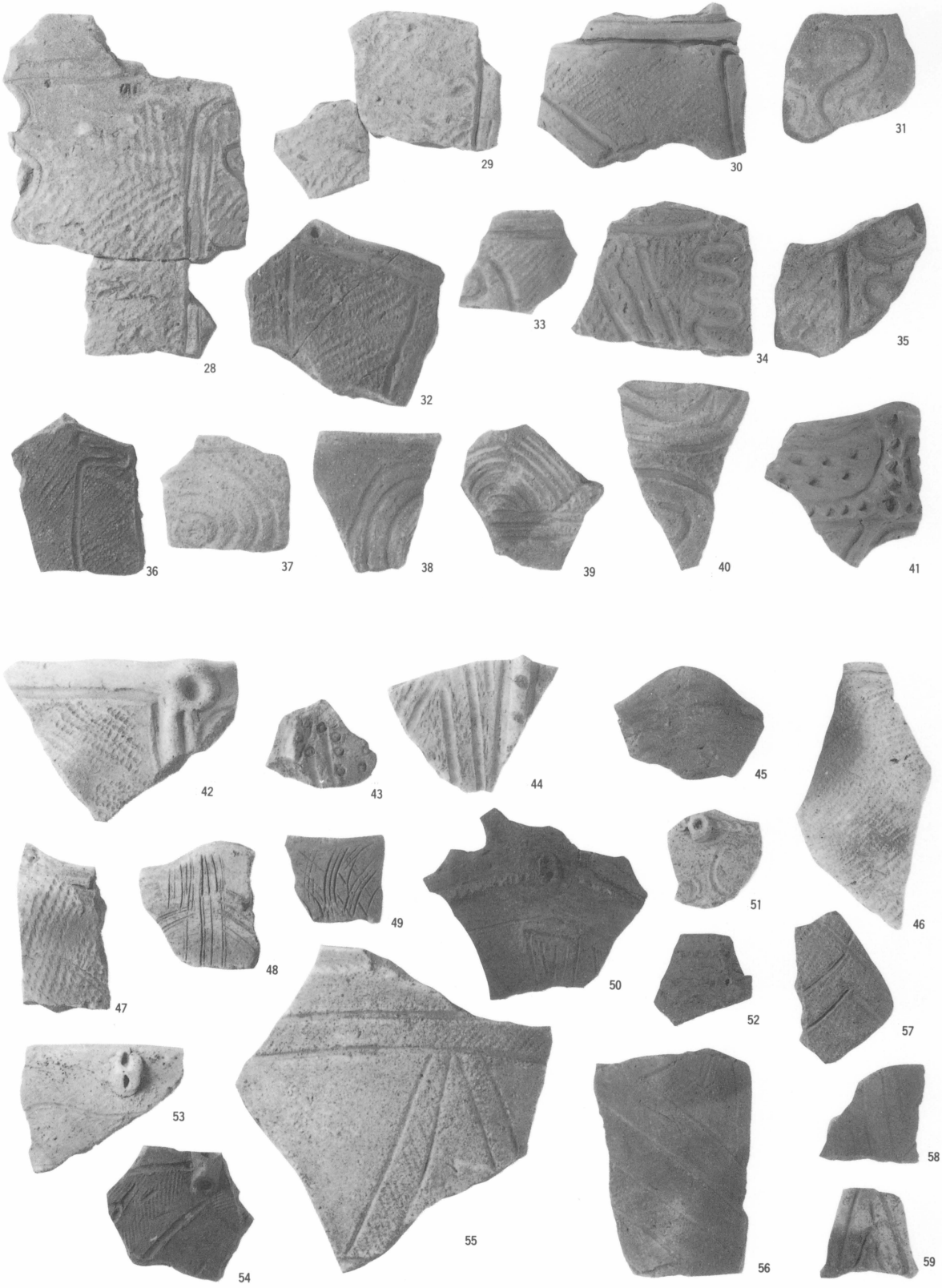
1T-005



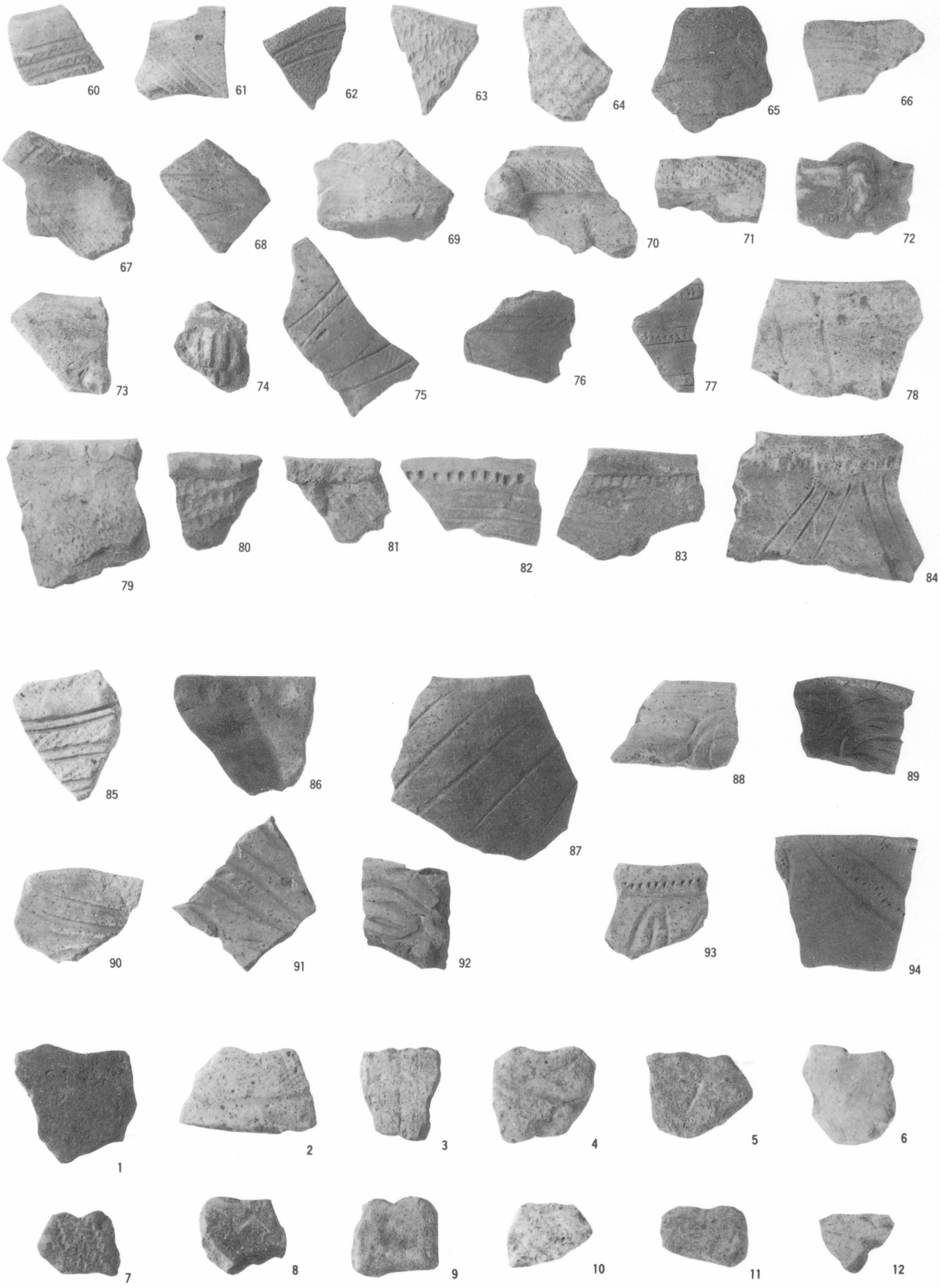




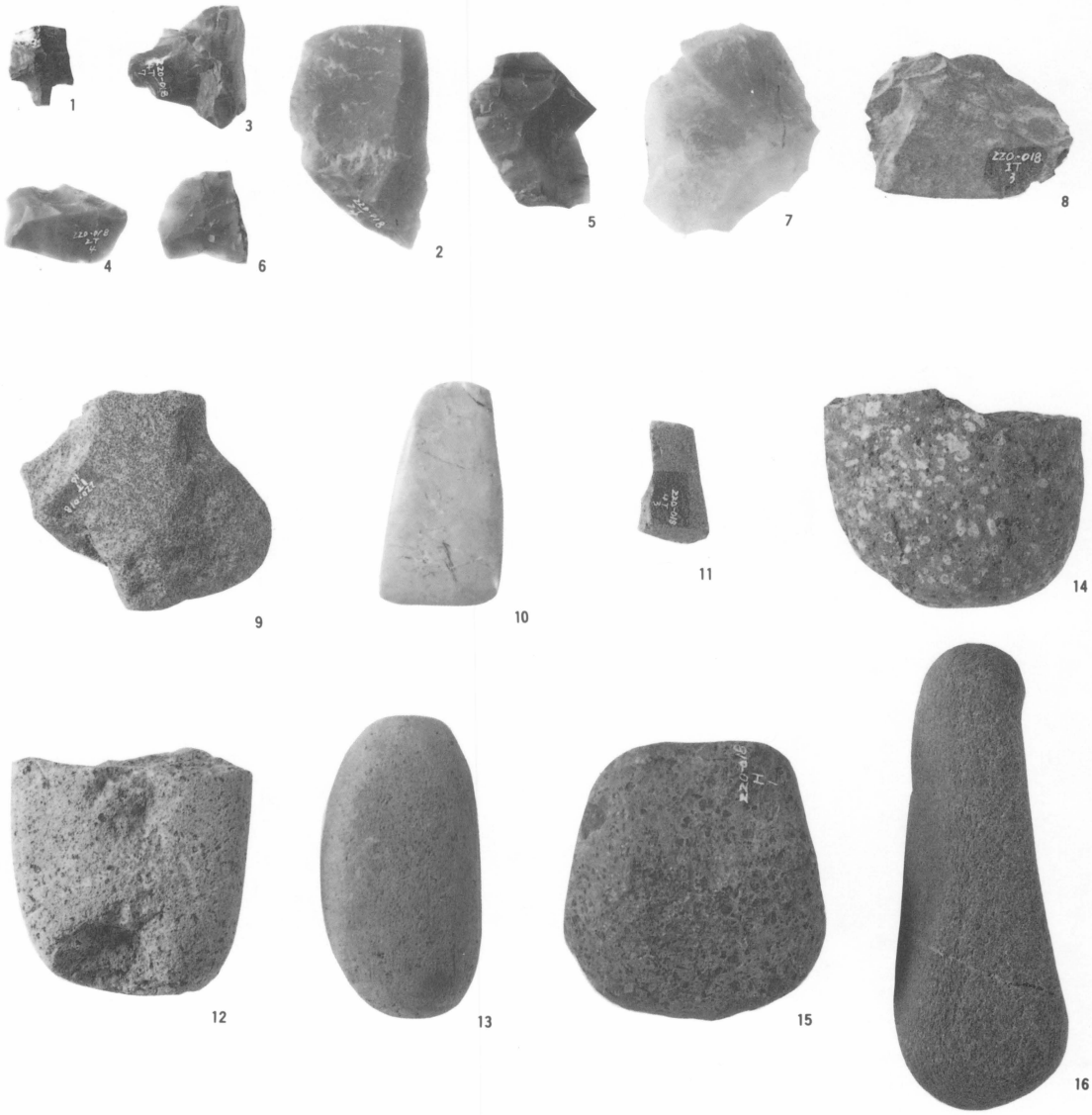
遺構内・遺構外出土土器（1）


28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59

遺構外出土器 (2)


60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12

遺構外出土器 (3)・土製品



遺構外出土石器

千葉県文化財センター調査報告第274集

流山市野々下貝塚確認調査報告書

平成７年３月25日　印　刷
平成７年３月31日　発　行
発　行　千　葉　県　都　市　部
編　集　財団法人千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809－2　☎043(422)8811
印　刷　株式会社エリート印刷
千葉市中央区市場町6－8　☎043(225)5881